

「救いの時が来た」

サムエル記上 第16章 1節～5節
ルカによる福音書 第2章 1節～7節

説教 岡村 恒牧師

主イエス・キリストはベツレヘムの町外れの馬小屋でお生まれになりました。ユダヤの人々は、ベツレヘムから救い主が来るという約束を信じて待ち望んでいました。

《油を注がれた者》、これは神の特別な賜物を受け、霊的な力を持つ指導者のことです。イエス・キリストの《キリスト》は、油を注がれた者という意味です。サムエル記に記されているサムエルは、ベツレヘムで神がお示しになる者に油を注ぎました。ダビデはイスラエル王国の最も偉大な王となりましたが、この王国が滅亡する時、エッサイの家系、ダビデの子孫から新しい救い主が生まれると約束されました。

ベツレヘムで1人のみどりごがうまれた。この方こそ主なるキリストだ。聖書は宣言します。神のご計画の中で1つ1つのことが実現していくのです。クリスマスの物語は、この世界が造られる前からご計画をお持ちの神が、約束を実現して下さった物語です。

しかしまた、ベツレヘムは悲しみの町になりました。ヘロデ王がベツレヘムとその近隣の子供たちを皆殺しにしたからです。東方の博士たちが拝みに来た新しい王とは、自分の地位を揺るがす存在だからです。また後にエルサレムも、深い悲しみにつつまれる場所になります。主イエスがそこで十字架にかけられてしまうからです。主イエスが生まれた場所、神の救いの約束の光が照り輝いたあの場所に、人間の深い罪が影を落としました。主イエスが十字架に架けられた日、昼間であるのに世界は暗闇に包まれました。

クリスマスは、闇の中に光が差し込んだ出来事です。クリスマス前の4週間、世界中のキリスト教会は、悔い改めの時を過ごします。私たちがもし自分自身を作り変えることができるのだとしたら、主イエスがベツレヘムにおいでになる必要はありませんでした。律法を守り、犠牲を捧げ、祈りの生活をして神に義とされることに、ユダヤ人は失敗をし、そして神は、ひとり子イエス・キリストを地上にお送りになりました。

約束された通りに、ベツレヘムに神のひとり子がお生まれになりました。「布にくるんで、飼葉おけの中に寝かせた。客間には彼らのいる余地がなかったからである。」（ルカによる福音書 第2章7節）私たちは自分の中に神を迎え入れるための場所を用意することに失敗します。私たちが神のために場所を用意できない時に、神は私たちのために場所を用意する決断をされました。主イエスは、十字架におかかりになる前夜、言われました。「わたしの父の家には、すまいがたくさんある。…あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。」（ヨハネによる福音書 第14章2-3節）

人が悔い改めて信仰を告白し、罪の赦しの洗礼を受ける時、それまで生きてきたその人は滅ぼされます。そして洗礼を経て、新しい命が与えられます。その命は、たとえ地上の旅が終わりを迎えても尽きることのない命です。終わりの日、主がおいでになるとき、用意された場所に迎え入れられる命です。この命が、一瞬たりとも私たちから離れないことが私たちに分かるように、主の食卓が用意されています。パンを受け、杯を受けるたびに、神の国の到来が、終りの日の約束が確実であることを信仰者は確認します。

主の約束が確実で、ベツレヘムで起こったように、終わりの日が確実に来るので、私たちは一緒になってハレルヤと讃美し、主よ来てくださいと祈り求めます。繰り返しみ言葉を聞き、主の食卓を囲みながら、神の約束が、どれほど確実であるかを確信して生きるようになります。

誰でも主イエスの救いの約束を信じ、洗礼を受けるなら、信仰の旅を歩み始めることができます。主イエスと無関係な人間は1人もいません。神がすべての人のために主イエスを地上にお遣わしになったからです。その約束に身をゆだねて、人生全体をかけて生きることが誰にでもできます。この幸いを、神に感謝しましょう。

（記 説教要約奉仕者）